

ダモイ東京

たどり着くまで その日まで

滋賀県 山中 十四雄

平成八年八月二十三日、私は、喜びと悲しみのドラマが展開された舞鶴港の岸壁に立った。奇しくも五十年

数年前の同月同日である、一日として忘れることのできなかつた「ダモイ東京」。山澄丸乗船の朝は細波小砂を洗う静かなナホトカの海だった。今日も変わらぬ静かな海である。遙か彼方から戦友の悲痛な叫び声、今にも聞こえる思いがした。万感胸に迫り断腸の思いであった。ここに数多く記述されている同志の思いも同じであらうと痛感する。

昭和十九年十月二十日、現役兵として敦賀歩兵一九連隊補充隊に入営。同年十月二十九日下関港出発、翌朝釜山に上陸。十一月一日黒河省愛琿芳六国境守備隊第六二部隊朝水第三大隊小柴隊に入隊した。翌二十

年二月初年兵教育を終え、同年兵はどこかに転属し、続いて六、七月頃大隊も二站陣地に移動したが、残留兵に加わり大隊本部に勤務した。

昭和二十年八月九日、朝、営庭に出ると上空を国籍不明らしい飛行機が飛ぶ。何であろうかと戦友同士話すると同時に非常ラッパが鳴る。直ちに営庭に整列した。ソ連参戦とのことで、緊急朝水旭山陣地に移動、戦闘配備についた。

午後五時、兵五人とともに旭山陣地の歩哨に立つ。

国境付近の友軍の爆破する爆音、炎々と燃え上がる火柱、両軍から照らすサーチライトに昼間のようで、人の動きがわかるほどであった。朝方伝令が来る。黒龍江付近と大五家子方面の偵察に出る。ソ連軍一個中隊らしいが大五家子に上陸したとのことであり、愛琿方面に北進した模様であるとのこと。十二時前帰隊、情況報告する。陣地では、飛行機の偵察が度々あり上空からの射撃も再々行われたとのことであった。

終戦の指示は記憶にない。十九日であったと思うが乾パン三袋が配布され、四日間にわたる行き先不明の

徹夜行軍となった。部隊から離れると狼の餌食となる恐れもある、戦友同士相励ましつつ、どこへ向かっているのかわからないままだったが、到着の場所は徒溝了と言うところらしい。ここで武装解除を受け、身軽になった。

二時間余り休憩の後、孫呉に向かって野宿を続けつつ行軍となった。道中各所に戦争の跡が目立つ。日が過ぎていたのであろう、子牛ほどにはれ上がった数多くの遺体を目前にして、戦争の恐ろしさを覚えた。たとえ敵のソ連兵であっても人間の死に変わりはない。目頭が熱くなる。止まれないので歩きながら手を合わせつつ、行軍を続けた。何を言っているのかわからないが、ソ連兵の「ダワイ、ダワイ、ヴィストラ」に追われる。これは早く早くということらしかった。

定かでないが、三日か四日野宿を続け、やっと孫呉に到着し旧官舎跡に入った。ここでは約一カ月余り、野外テントに保管された糧秣の貨車への積み込み作業が続いた。

九月下旬、千人を単位とする作業大隊が編成され、

徒歩で孫呉を出発した。三日目にソ連に渡る。各農場を巡回しつつ野営し、イモ掘り作業に従事する。果てしなく続くイモ畑、その農場の広大さに驚く。

十月下旬ライチハに到着。ここで二分され五百人はブレーヤに向かったことで、私たちの部隊はさらにイモ掘り作業を続け農場を回る。寒さが一段と加わってきた。野営は、テントはなく毛布四枚をあわせて屋根を作る。作業が終わると薪を集め、真ん中に細長い穴を掘りイモを焼いて夕食代わり。水はどうしたか記憶にない。焚火の跡に蓋をし足を出して寝る。下は乾燥薬に潜り込み、上は三人で毛布一枚かぶる。しばらく寝るが寒さが身にしみ目覚める。再度夜中に火をたいて暖まる。時間がわからない。時計はソ連兵にとられてない。朝の起床は寒さが起こしてくる。この農場が終わると次の農場に移動した。

十一月下旬、学校跡のような建物に入った。アラチカ収容所であった。お陰で寒さからは身を守ることができた。上下二段式の寝むしろが各班に割り当てられ、一椎に二枚の毛布が配られた。見ると日本の軍隊

毛布の幾分使い古されたものだが、これを敷き、着のま着のまま横になる。我々にとつては今ならば羽毛布団にも匹敵するものだった。

食事は、茶盆ぐらいの黒パン、高さ十センチ程度のものを二十人に切り分ける。どれが大きいか、みんな目を光らせる。炊事兵が粟を浮かした重湯のようなスープを配布するが、食器がないので空き缶が食器代わりである。

食事が終わると、何もすることのない我々は早速横になって寝ながら自己紹介した。四国の家には君たちと近い息子がいると言う補充兵の戦友は、疲労の顔色が一段と痛ましく見えた。

起床の声に起こされ舎前に整列して人員点呼が始まる。「アジン、ドア、ツリ」、何のことやらわからない。後で聞いたなら一、二、三の数字である。とかくソ連将校の勘定が遅い。寒さが厳しいので立っていられない。みんなぶつぶつと足踏みしながら文句を言っているが通じなかった。

洗面どころか便所もないので、敷地の隅に穴を掘っ

た。屋根もなければ囲いもない、仕切りもない。男ばかりの世帯は結構なもので、お互いの親密度が深まった。

朝食が済んで、各班ごとに兵舎に隣接する丘陵地帯に何の穴かわからないが命ぜられるまま穴を掘る。凍結して固くて掘れない。鶴嘴もなければ金鍬もない、身体より長い鉄棒を頼りに穴を掘る。後で聞いて驚く。帰国どころか我々の収容所の建設であった。

望楼が建ち、逃亡をおそれての銃を持ったソ連兵の監視台が作られる。見回り兵隊が来ては「ヤボンスキー」と我々のことを呼び、「ダワイ、ダワイ（早く早く）」とソ連兵の得意言葉が捕虜の身にしみた。

いよいよ本格的な作業が始まった。三十人を単位とする作業班が編成され、露天掘りの炭坑作業のほか製材所、土木建築現場にと作業に出た。我々三人は幸いにもイモ倉庫の選別作業だった。

各班にリーダーが選任され、班長と呼ぶことにし、全員階級章が外された。上を主体とする命令系統は廃止され、大日本帝国の完全崩壊を認識した私たちの民

主的な共同生活の始まりであった。みんな平等な作業員である。不満をとなえる者は誰もいない。

グループにはそれぞれ二人のソ連兵がつき、五時になれば「ダモイ、ダモイ、ヴィストラー（早く早く）」とせき立てる。ソ連の一般労働者も同様で作業を中止する。半分掘った穴でも、釘打ちでも中断する。仕事にくくりのないのに驚く。労役はすべてノルマ制でリーダーがチェックした。

我々三人は二月初めからイモの貯蔵庫での選別作業に出た。洞窟に三段に貯蔵されているジャガイモの不良品を取り除く。冬期はストーブをたいて一定の温度を保つのでありがたい仕事である。監視兵はいないが管理する老人がいた。目を盗んではストーブで焼いて食べるが、老人も見えて見ぬふり、顔を見合わせてニヤリと微笑む。我々にとっては実にありがたい良い老人であった。

約半年してナチャニクに呼び出された。班長もびくびくした。冷や冷やししながら事務所に行く。ありがたいいことにソ連司令部事務所の夜警であった。五時から

朝将校が出勤するまでということ、昼間は休みとなる。炭坑等の同士からねたみの声もあったが、将校たちや家族の人たちとも親しくなった。昼間時々呼びに来る。会食中で、これを食べよとパンをくれる。彼らのパンは我々のと違い白い。「スバシーボ（ありがとう）」と受け取り食するが、喉が通らないほどに味が違う。ここでも隔てのない人間性、昔の歌のとおり「昨日の敵は今日の友」、ソ連人の人間性に感動した。

その後、約一年ほどして炭坑の作業に従事した。露天掘りの炭坑である。機関車が運び出す土捨て場の線路の移動で、三十人の兵隊が金棒をかけて線路を押し出す。不良品を取り替える。「オーセイシヨ」の掛け声とともに皆が一丸にならないとうまく動かない。怪我人が出る。お互い助け合い「おーいどうもないか」「どうかしたか」と声をかけてくれる。皆が元気に祖国に帰らなければならない。たどりつくまでその日まで「思いは皆同じである。

炭坑作業は総てノルマ制で、作業が終わるとナチャニクが一日の仕事の量を記録する。ほとんどが100

パーセント以上で、超過分は一月ごとに給料として支払われたが、残念なことに使う場所がない。後日改善されたであらうか。

約六カ月後、突然名前の掲示に驚く。各班半数の帰国命令である。夢の中で父母と手を取り合って泣いている姿が目が覚めた。翌九時舎前に整列、所長の労苦をねぎらう言葉があり、戦友と手を取り合い別れを告げた。営門前では全部の将校が整列して手を振り別れを惜しんでくれた。“昨日の敵は今日の友”再度痛感した。今もなお脳裏に焼きついている。将校の奥さんやおばあさんまでも別れを惜しんでくれた。隊伍から離れ、一人一人と手を取り合い涙を流して別れを告げた。

夕方ライチハに到着した。名簿確認後、貨物車に乗ったように思うが、何日乗っていたやら無我夢中で覚えていない。戦友に起こされ、海が見えたと皆驚嘆。着いたところがナホトカの港であった。まだまだ信用できない、どこに連れていかれるかわからない。不安であるのか、捕虜のひねくれ根性を持ちながら、夕

方、日本客船山澄丸に乗船した。

朝方、誰かの「おーい、日本が見えたぞ」との叫びが目が覚めた。船窓から目に映ったのは舞鶴港と孟宗竹の懐かしい光景であった。これで大願の帰国の夢が実現したことを実感した。

私は昭和六十三年七月、三十有余年ぶりに中国各地を訪ねた。友軍が爆破した跡、中国軍の管理になった兵舎陣地、中でも黒龍江を遊覧してソ連の状況は今も変わらないのに驚いた。徹夜行軍の行程も今はパスの旅ができる。平和な時代に感謝しつつ、各陣地で下車、戦友の冥福を祈る。懐かしの朝水兵舎はなく、中国人の豚舎に変わり、炊事場の煙突のみとなった。

陣地は雑木が生い茂り、残念ながら通行困難のため入り口で香を供え、戦友の霊に手を合わせ冥福を祈りつつ、中国九日間の旅の帰路についた。

澄み渡る青空を眺めつつ、シベリアの奥地に埋葬した戦友の冥福と、起こしてはならない不幸な出来事のないことを祈りつつ、機上の人となった。